



brain train

4月6日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

4月6日のおはなし「brain train」

もうどのくらい乗っているだろうか。ひんやりとつめたい金属の支柱に頬を押し付けながらぼくは考える。窓の外はすっかり山の景色だ。木々が枝を張り出し、今にも列車の窓をたたきそう。開けた窓から流れ込んで来る空気は冷たく澄んでいて、ちょっと身震いするほどだ。人家はめったに見えない。いや。すでにまったく見かけない。人里離れた深山を列車はひた走る。

立ったままうとうとしていたのか頭がぼんやりして、いつごろからこの列車に乗っているのかなか思い出せない。突然真っ暗になる。トンネルに入ったのだ。ゴトゴトと音を立てて走る古びた列車は車内灯もつけない。昼間の日差しあふれる景色が一瞬にして消え、全てが闇に閉ざされる。何も見えない暗闇。トンネルの中にいると判断できるのはその音からだ。耳だけが信頼できる器官になる。

トンネルを抜ける。窓から光がなだれ込み、闇に慣れ始めた目はその眩しさにくらんでしまう。次の瞬間、目に飛び込んで来るのはフルーツのような黄色、紅葉を思わせる鮮やかな赤、どこまでも吸い込まれそうな深い青、珊瑚礁を思わせる緑がかったブルー。新緑の明るい緑。フラミンゴの群れのようなピンクのかたまり。視界を埋め尽くす色彩の氾濫。ぼくは思わず知らず声をたてる。

「だから言ったろう？」サングラスをかけた父が言う。「ここではスコップが必要なんだ」

スコップ？ サングラスじゃなくて？ ぼくは聞き直そうとするが、もちろん父がそばにいるわけがない。父はぼくが幼稚園のころに雪山で遭難死してとっくにいない。かわりに学生時代のころに同棲していた彼女がそばに立っていて、ほら、と真っ黒なサングラスを差し出して来る。

手を伸ばし受け取ったのは一本の糸だ。それはとても長く、とてもカラフルで、たぐり寄せてもたぐり寄せても、赤黄青緑とさまざまに金属的な光を放ち続けるばかり。いっこうに端にたどりつけない。橙紫桃藍と色を変えながら糸はどんどん太くなりいまはもう綱と呼んでもいいくらいだ。いったいどこから、ぼくは疑問に思う、こんなにも長い綱がやってくるんだ？

ああそうか。急にすとんと腑に落ちた気がしてぼくは列車の窓の外を見る。この列車は決して端にたどりつくことはないんだ。窓の外は色彩の海で、それは比喩的な意味ではなく、ほんとうに海の中で、海の上で、海ではないどこかで、神の悪ふざけのようなデザインの魚が無数の人々を追いまわしている。人々は逃げ惑いながらもそれを楽しんでいる。

ほらね、と懐かしい声がする。本当だと答えながら声がした方を向く。君がそこにいる。

「天国は」ムベキが漆黒の肌を光らせながら言う。「おまえたちだけのものだとでも思っていたか？」

「ムベキ」ぼくは喉を詰まらせる。「会いたかったよ」

「もちろん会えたさ」ムベキは姿をとどめて答えてくれる。「おれたちの愛に終わりはない」

(「天国」 ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

brain train

<http://p.booklog.jp/book/47666>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/47666>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/47666>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.